

金沢市立内川小学校

児童数 47人

自己有用感を高め、互いに認め合い思いやりの心の育成

1. 福祉教育の捉え方

内川小学校は、金沢市の南部に位置し、自然豊かな環境の中で児童達は伸び伸び育っている。小中併設校であり、小中学校が連携し9年間の見通しを持った教育活動が行われている。地域の方々は学校教育に関心が高く、総合的な学習の時間でも講師となり、積極的に協力いただいている。

児童は、地域の方々と交流する機会が多く、地域の「たけのこ祭り」や社会体育大会の参加、近くの社会福祉施設の訪問など、今までもたくさんふれ合いを経験している。

本校では、「ふるさとに誇りを持つ、心豊かな子どもの育成」を教育目標に掲げている。地域の方々とふれ合い、社会福祉施設や障害のある方々との交流、様々なボランティア活動を通して、社会福祉への理解と関心を持ち、児童の自己有用感を高め、互いに認め合い、思いやりの心を育てることをねらいとして、本事業に取り組んできた。

2. おもに取り組んだ活動について

(1) 暑中見舞い、年賀状を送る活動

本校では、全校児童が一人1枚、暑中見舞いと年賀状をスクールサポート隊や図書ボランティア、公民館の方々へ感謝の言葉や絵をかくて送っている。児童はどのようにえがけば喜んでもらえるかを考え、工夫してはがきを作成する姿が見られた。

地域の方々からの返信も児童のもとに届き、お世話になっている人へ感謝の思いを伝えることの大切さを実感することができた。

(2) 地域・PTAと一緒にいる活動

毎年7月、通学路を花でいっぱいにしようと公民館、PTA、児童と一緒に花を植える「花いっぱい活動」を行っている。

また、10月には、1・2年生が来年の春に花が咲くように通学路の花壇にチューリップの球根を植えている。

今年度は、2グループに分かれ学校の周りを保護者と一緒にゴミ拾いも行った。



【花いっぱい運動】

(3) 社会福祉施設などでの訪問、交流

～「第三万陽苑」「ハビリポートわかば」～

【令和元年度】

・第三万陽苑とハビリポートわかばの入居者の方々に運動会に招待し、小中学生の演技やがんばりを見ていただいている。児童はたくさん声援や拍手をもらい、とてもうれしそうにしていた。

・2年生が第三万陽苑を訪問し、入居者の方々と交流した。

【令和2年度】

・2年生が、12月に第三万陽苑を訪問し、クリスマスメッセージカードと1年生が作った絵馬のカードを渡した。



【第三万陽苑の訪問】

【令和3年度】

・7月と12月に、第三万陽苑とハビリポートわかばの入居者の方々へ「コロナに負けずにがんばろう！」というメッセージを書いて送った。今年度もコロナ禍により交流ができないため、6年生ありがとうの会の出し物をビデオで撮影したものを見ていただいた。

(4) 手話教室【4年生】

講師の青井佳奈子さんから手話の意味や自分の名前、あいさつ等の手話を教えてもらい、最終的には学んだ手話で自己紹介ができるようになった。

手話でのやりとりを通して、自分の思いを一方向的に伝えるだけでなく、相手の思いを受け止め、理解しようとしていた。



【手話を習う児童】

(5) 車いすバスケット体験【5・6年生】

車いすを利用する人は、どのような生活を送っているのか、車いすバスケットはどのようにするのか関心を持ち、岩崎大輔さん、半田幸司さんを招き、話を聞いたり体験を行ったりした。

まず、車いすの使い方を教えてもらい、おにごっこや車いすバスケットを一緒に楽しんだ。

脚に障害があっても人が幸福と感じる内容やその感じ方や考え方はいろいろあることを学んだ。また、人として生活を豊かに発展させようという思いの大切さを知ることができた。



【車いす体験】

(6) パラリンピック種目“ボッチャ”体験

【1・6年】

パラリンピック種目の“ボッチャ”について、調べ学習を行い、体験も行った。コロナ禍のため講師は呼べなかったが、児童は調べたことをもとに楽しんで試合を行った。また、クラブでも遊び方を紹介した。パラリンピックの実際の映像を見て、「すごい技を行っていた。」「重い障害のある人でも笑顔でできていて、誰でも楽しくできる種目だと思った。」と実感していた。6年生の児童は、“ボッチャ”を1年生に教え、一緒に楽しく活動する姿が見られた。



【“ボッチャ”を楽しむ児童】

3. 成果・反省について

これまでの取り組みを通して、地域の方々や高齢者の他に、障害のある方々への理解を深めることができ、様々な人が様々な環境で生活していることに気づくことができた。また、ボランティア活動や体験を通して、「誰かのために役に立つことができた」という自己有用感も高めることができた。

しかし、昨年度からコロナ禍のため、高齢者や施設の入居者と交流する機会が非常に少なくなっている。それに合わせて、なかなかボランティア活動ができずにいる。今できることを考え、いろいろな方法を用いて活動を推進していかなければならないと考える。

児童が今後の学校や地域の生活の中で、一人ひとりの違いを認め、思いやりを持って人々と接することができるように、また、自分もたくさんの人に支えられていることを自覚し、感謝の気持ちをもって生きていけるように支援をしていきたい。

(執筆者 北脇 陽子)